

【論文】

ジャーナリズムの起源

いかにして〈ジャーナリズム〉の概念が
18世紀フランスで生まれたか、に関する考察

The origin of *Journalisme*:

A study on how the idea of "journalism" was invented in 18th-century France

筑瀬重喜

CHIKUSE, Shigeki

キーワード: ジャーナル; ジャーナリズム; 日記; 仕訳帳; 新聞; 語源論; メタファー;
総括性; ネットジャーナリズム; アーキテクチャ

Received: 2009. 9. 20 Accepted: 2009. 10. 9

はじめに

ジャーナリズム (英語: *journalism*) の起源についてはこれまでも様々に論じられてきた。一般には、諸イデオロギーを媒介するメディアとして新聞が普及した17世紀、市民革命期のイギリスに求めるか、20世紀初頭に新聞社を中心にメディア産業が成立したアメリカに求めるかのいずれかであった。

しかし、「ジャーナリズム」という言葉が元をたどればフランス語の「*Journalisme*」であり、さらに元をたどれば日記や仕訳帳を意味する「*Journal*」であったことは、あまり記憶に残されていない。この小論は、従来の試みとは違い、語源論を手がかりにフランスにおける「*Journalisme*」の起源をたどることによってジャーナリズムの原像ともいえる姿をさぐるを試みる。

1. ジャーナリズムの起源への誘い

ジャーナリズムという語は不思議な言葉である。まず、「ジャーナリズムとは何か」という問いに対する答えが、論者の数だけあるといえるほど多種多様なことである。「ジャーナリズム」という語が共通理解を得られるのは、清水幾太郎の「一般の大衆にむかって、定期刊行物を通じて、時事的問題の報道および解説を提供する活動¹⁾」の基本的な定義までであろう。そのレベルを超えた規範的な定義となると「対立 [的] 社会感覚の表現²⁾」(長谷川如是閑)、「ジャーナリズムは、いま伝え、いま言わなければならないことを、いま言う行為と過程³⁾」(新井直之)「ジャーナリズムは権力を監視し、社会正義を実現することで、自由と民主主義を守り発展させ、最大多数の最大幸福を追求する⁴⁾」(原寿雄)と多様である。

共有される定義は常に空疎なままであるにもかかわらず、この言葉はあたかも自明であるかのごとく人口に膾炙している。論議が不十分だから定義できていないだけなのか、それとも元来、定義不能な言葉なのか。このような「ジャーナリズム」の不思議さが、その起源の探究へと人びとを誘うのであろう。

この小論は、このような「ジャーナリズム」という概念がどのように生まれたのかを、一定の制約の下で、可能な限り源までたどることを目標にしている。「ジャーナリズム」はいまでこそ知らぬ人がいない「大河」であるが、その源となる山奥の谷間の一滴があるはずである。そこに近づくことで、なにがしかの知見が得られることを期待している。

注意を喚起しておきたいのは、ジャーナリズムという思想の原点を求める意図はないことである。「ジャーナリズム」が生まれた200年余り、その間にさまざま論じられてきた規範的倫理的意味については、筆者として考えはあるが、別の機会に譲る。最近、人文・思想界で語られる機会が増えた用語を使えば、小論が目指すのは、ジャーナリズムの「アーキテクチャ⁵⁾」である。

ジャーナリズムの起源を主題とした研究のなかで、小論が独自性を主張できるとすれば、語源論的な方法をとることである。ただこの点で多少の解説が必要であろう。語源論的な方法といえば、一種の胡散臭さが付きまとうからである。クリティカル・シンキング (Critical Thinking) においても、誤った論議の型の一つとして、*etymological fallacy* (語源的虚偽)、つまり「ある概念の本質はその語の語源を調べればわかる」は必ずしも正しくはないとする考え方が、挙げられている⁶⁾。言葉は必ずしも元の意味の痕跡を持ち続けるとは限らないことに思い至れば、こうした思考が必ずしも正しくないことは明らかである。

小論はこうした誤謬とは無縁のつもりである。「ジャーナリズム」の起源をたどる手法の一つとして語源論的方法を試みたところ、偶然にも現代のわれわれがジャーナリズムという言葉に抱いているイメージの祖形ないし原型を見出すことができた——ということにすぎない。これはおそらく偶然によるたまさかの事態であろう。もちろん「語源論的方法によればすべての概念の本質が明らかになる」と主張するつもりは最初からない。

ここで、先行研究について概観する。「ジャーナリズムの起源」というテーマは魅力的であるためか、いくつかの著書や論文がある。参照したのは次のとおりである。

- ・別府三奈子『ジャーナリズムの起源』、世界思想社、2006年
- ・原田範行「ジャーナリズムの起源」『英文学論考』31、2005年
- ・Chalaby, Jean K. *The Invention of Journalism* 1998年、New York: Palgrave Macmillan
- ・村上直之『近代ジャーナリズムの誕生：イギリス犯罪報道の社会史から』岩波書店、1995年

共通してみられるのは、ジャーナリズムの起源を英米に見ていることである。別府は、20世紀初頭にジャーナリズムが抱える諸問題を解決する手段として登場した「ジャーナリズムプロフェッショナル論」を扱う。このテーマがなぜ「ジャーナリズムの起源」となるのかはよく分からないが、いずれにしても20世紀の米国に限っている。原田は逆にイギリスの18世紀に求める。1728年にロンドンで初演され、当時の政権を皮肉って評判になった劇作家ジョン・ゲイのバラッド・オペラ『乞食オペラ』などに挙げている。

Chalaby も、「新聞が産業となる以前は、そこにあった言説は政治性というものを核心にもち、かつパブリックなるものとしての特徴を備えていた。そうしたイギリスの新聞の言説は、19 世紀にはいって新しい言説ジャンル、つまりジャーナリズムへと移行⁷⁾」したとして、19 世紀以降の英米に限った話となっている。さらに村上は、サブタイトルにあるように、イギリスの犯罪報道に求めている。ジャーナリズムの源を 18 世紀フランスに求めることを主題とする研究は探し出しえなかった。

なぜジャーナリズムの起源として 18 世紀のフランスが軽視されるのか。考えるのは次のような理由であろう。近代的新聞は、封建的な支配階級に代わる新しい市民階級が台頭する過程で生じた政治的な動乱を背景に、さまざまな論議や論争を伝える政治的コミュニケーションのメディアとして始まった。これが最初期のジャーナリズムとされる。このような状況が必要とされる時代が最も早く到来したのはイギリスであった。1649 年のピューリタン革命、1688 年の名誉革命を経て市民社会の基礎が確立する。この経過の中で言論の自由も確立する。こうした過程は、ユルゲン・ハーバーマスが『公共性の構造転換』において、イギリスのコーヒー・ハウスやサロンで培われてきた「文芸的公共圏」が、新聞を媒体として「政治的公共圏」へと至る過程として描いた⁸⁾。ところが、フランスは政治状況がイギリスと比べて遅く、新聞発展の面でもイギリスに後れをとった。これがジャーナリズム研究において、フランスでの研究への関心が薄い理由の一つではないかと推測される。

もちろんフランスの新聞研究は皆無ではない。森原隆は、「近世フランスの新聞出版とジャーナリズム--『ガゼット』紙を中心に」(2004 年、『史学研究』244)や「C.-J.パンクックとフランス革命前夜の新聞・雑誌」(1994 年、『金沢大学文学部論集. 史学科篇』、通号 13・14)などで実証的な研究を重ねている。ただ、直接的なジャーナリズムの起源についての論議はない。森原によれば、日本ではあまり知られてはいないが、フランスのアナール学派のうち「書物・社会グループ」の研究者が、フランス革命前のいわゆるアンシャン・レジーム期の新聞の基礎研究に集中しており、その成果として『ジュルナル事典 (Dictionnaire des Journaux)』などを出版している。今回は残念ながら参照することはできなかった。

2. 「ジャーナリズム」が生まれた背景

この章では準備のための足元を固める。まず簡単に「ジャーナリズム」へ至る言葉の歴史を、『グラン・ロベール辞書 (Le Grand Robert de la Langue Française)』でたどってみる。

まずラテン語で「日々の、毎日の」を意味する形容詞 *diurnatem* から 12 世紀に同じ意味をもつ形容詞 *ジュルナル (journal)* が生じた。ほぼ同じころ「一日に農作業できる土地の面積単位」の意味で名詞として使われるようになった。続いて 14 世紀に「日々の行動を記録した冊子」つまり「日記」に近い意味が生まれた。16 世紀の中ごろに、商業用語として「収支を記録した冊子」つまり「仕訳帳」「会計簿」の意味で使われ始めた。「出来事を伝える定期行物」の意味でタイトルとして使われたのは 1625 年とされる。1777 年に現在の「新聞」、つまり「一般的なニュースを日刊で伝える紙媒体」の意味となった。

ジュルナルから派生した言葉として *ジュルナリスト (journaliste)* がある。journal に人を

表す接尾辞 *iste* が付いたもので、18 世紀初頭に「ジュルナルの発行者」の意味で記録されている。その後、現在のジャーナリストつまり「ジュルナル発行者だけでなくその仕事に従事する人」の意味となった。

さて肝心の「ジュルナリズム」であるが、これは *journal* に、元の語の状態、作用、主義、特性、病的状態などを示す接尾辞 *isme* が付いた語で、初出は大革命前夜の 1781 年である。このときは「ジュルナリストの仕事」の意味とされ、続いて「ジュルナルとジュルナリストの全体」の意味が加わった。その後これがイギリスに伝わった。『オックスフォード英語辞典 (The Oxford English Dictionary)』によると、イギリスでの初出は 1833 年である。

次にフランスにおける時事的定期刊行物の状況を概観しておく。いずれも先ほど提示した、森原隆「近世フランスの新聞出版とジャーナリズム--『ガゼット』紙を中心に」と「C.-J. パンクックとフランス革命前夜の新聞・雑誌」など一連の研究に負っている。

さて以降の便宜を考えて、この小論に限定した時代区分を以下のように考えた。

【第Ⅰ期 (～1624)】「ジュルナル」に「日記」「仕訳帳」の意味しかなかった時期

【第Ⅱ期 (1625～1776)】ジュルナルに「定期刊行物」の意味が生じた時期

【第Ⅲ期 (1777～1780)】ジュルナルに「新聞」の意味が生じた時期

【第Ⅳ期 (1781～)】ジュルナリズムという語が生まれて以降

第Ⅱ期以降を詳細に見ると次のようになる。

【第Ⅱ期】欧州各国で新聞の原型となる刊行物、つまり①時事的なニュースを②不特定の読者あてに③安価に④定期的に発行する——という 4 つの条件を備えた刊行物が続々発行された⁹⁾。フランスでその嚆矢となったのが 1631 年の『ガゼット (Gazette)』であった。『ガゼット』は、もともと医者であったルノー (Renaudot, Théophraste) が、宰相リシュリューの支援を受けて創刊した定期刊行物である。当時はルイ 13 世が絶対王政の基礎を確立しようとしていた時期で、『ガゼット』を「官製メディア」として利用したと思われる。

政府はこの後 30 年余り、『ガゼット』以外の発行を認めなかった。その後認められたのは 1665 年の学問・学芸誌『ジュルナル・デ・サヴァン (Journal des Savants)』と、1672 年の文芸通俗誌『メルキュール・ギャラン (Mercure Galant)』のみであった。

1685 年、ルイ 14 世は、プロテスタントのユグノーに対して条件付きで信仰の自由を認めていた「ナントの勅令」を廃止した。その結果、多くのユグノーが国外に亡命した。彼らが国外で発行する政府批判のフランス語定期刊行物が数多く出版され、フランス国内へ流入した。これを機会に国内の規制も緩和された。森原はこの時期に「ジャーナリズムの雛形のようなものが形成されていった¹⁰⁾」としている。

状況が急に動き出したのは 18 世紀のなかばである。1756～63 年の七年戦争や王室の浪費をきっかけに財政危機をむかえた。この前後にいわゆる啓蒙思想が盛んになり、1748 年にはモンテスキューが『法の本質』を著し、1751 年には『百科全書 (Encyclopédie ou Dictionnaire Raisonné des Sciences, des Arts et des Métiers)』の刊行が始まっている。

時代を反映した「ジュルナル・ポリティーク」と総称される政論誌が拡大し、『ガゼット』は低迷した。1761 年に政府の管理下に入り、『ガゼット・ド・フランス (Gazette de France)』と改称したり、一般市民向けに、事件や事故の報道も始めたりしたが、効果はなかった。

【第Ⅲ期】1777年、初の日刊紙『ジュルナル・ド・パリ (Journal de Paris)』が発刊された。イギリスの『デーリー・クーラント (Daily Courant)』に遅れること75年であった。

【第Ⅳ期】1787年には国庫の破産が確実となり、ルイ16世が税制改革を試みようとする。これを機に民衆の不満は爆発し、1789年のフランス大革命の激動へとなだれ込む。この時期に「ジャーナリズム」という新語がフランス社会に受け入れられた。

3. 「ジュルナル」などの語はいかに語義を広げてきたか

本章ではこうした事情を背景に、「ジュルナル」や「ジャーナリズム」などの語がどのように意味を広げてきたかをたどる。本来は文献を渉猟して広範な中から探るべきであるが、ここでは簡易な手段として、17～19世紀に盛んにフランスで発行されたフランス辞書・事典に限って考えることとする。もちろんこれらの文献が当時の一般の言葉の運用を的確に伝えているという保証はないが、枠組みの一つとしては妥当なものと考えた。取り上げたフランス語辞書・事典では次の8種である。データは編集主体、発行年、書名の順である。

① de Rochefort, César. 1685

Dictionnaire Général et Curieux contenant des eloquens discours fur les Mots les plus utilisez en la Langue Française

② Furetière, A. 1690

Dictionnaire Universel Contenant general tous les Mots François

③ L'Académie Française. 1694

Le Dictionnaire de L'Académie Française

④ Furetière, A. 1727

Dictionnaire Universel Contenant general tous les Mots François

⑤ Richelet, Pierre. 1759

Dictionnaire de la Langue Française ancienne et moderne, nouvelle édition

⑥ Diderot, Denis et d'Alembert, Jean le Rond. 1751-1772

Encyclopédie ou Dictionnaire Raisonné des Sciences, des Arts et des Métiers

⑦ L'Académie Française. 1762

Le Dictionnaire de L'Académie Française, 4ème édition

⑧ Bescherelle Aîné. 1887

Nouveau Dictionnaire ou Dictionnaire Universel de la Langue Française

それぞれの略称は、編者名などから、順に①『ロシュフォール』②『フルチエール (1690年版)』③『アカデミー初版』④『フルチエール (1727年版)』⑤『リシュレ増補版』⑥『百科全書』⑦『アカデミー4版』⑧『ベシエレル』と区別する。なお辞書は『ベシエレル』のみ原典を使用した但那以外はリプリント版を使用した。『百科全書』のテキストは、アメリカのシカゴ大学とフランス国立科学研究センター (Centre National de la Recherche Scientifique) が共同で行っている ARTFL (The Project for American and French Research on the

Treasury of the French Language) のサイト (<http://artfl-project.uchicago.edu/node/39>) から得た¹¹⁾。

以上の辞書の中からジュルナル、ジュルナリスト、ジュルナリズムの 3 語の推移を確認したのが次の「表 1 フランス語の journal, journaliste, journalisme に関する各辞書の記述の変遷」である。なお表中 (i)(ii)(iii)…で示したのは語義、《》内はそれ以外の記述について解説である。◆以下の数字はその項目を記載する語数である。ただし数字は概数である。

表 1 フランス語の journal, journaliste, journalisme に関する各辞書の記述の変遷

journal	journaliste	journalisme
1685 年	①『ロシュフォール』辞書	
記載なし	記載なし	記載なし
1690 年	②『フルチエール』辞書	
(i)日記(ii)仕訳帳(Le Journal des Audiences du Parlement などの解説)(iii)航海日誌(iv)土地の単位◆280 語	記載なし	記載なし
1694 年	③『アカデミー』辞書	
(i)土地の単位(ii)日々の(iii)ある国または地域の出来事の報告(Le Journal des Savants, Le Journal de L'Académie Royale など 10 種類の journal を紹介)◆220 語	記載なし	記載なし
1727 年	④『フルチエール』辞書	
《語義的には 1690 年版と変化ない。種々の journal への解説が増加》◆520 語	journal 発行人◆60 語	記載なし
1759 年	⑤『リシュレ』辞書(改訂増補版)	
(i)ある地域ある治世の毎日の出来事の話(アンリ3世の journal, Le Journal de Paris についてコメント)(ii)仕訳帳(iii)Journal des Savants に関する事典的解説(iv)航海日誌(v)土地の単位◆330 語	書物、人物について、文芸、学問、芸術に関して語る journal を発行人(「正義の精神と公正な心をもたねばならない」などジュルナリスト論)◆110 語	記載なし
1751~72 年	⑥『百科全書』	
(i)日記(ii)仕訳帳(iii)新刊本の要約や技術・学問の発見を記した定期刊行物。《以下百科項目(i)Journal des Savants(ii)ペイエの Les Nouvelles de la République des Lettres などの欧州各国の journal の解説》(iv)航海日誌◆2030 語	文学、技術・学問などの作品の出版にかかわる人(以下はジュルナリスト論)◆680 語	記載なし
1762 年	⑦『アカデミー』辞書(第 4 版)	
(i)仕訳帳(ii)ある国、地域などの出来事を日々記録したもの(iii)Journal des Savants(iv)毎月の新刊書などの解説を集めた書としてさまざまな Journal が出ている⑤土地の単位◆200 語	journal 発行人◆13 語	記載なし
1887 年	⑧『ベシエレル』辞書	
(i)毎日の(ii)仕訳帳(iii)ある分野、地域についての日々の報告。日記(iv)航海日誌(v)日刊ないし定期的に紙に政治的、学問的、文学的なニュースを載せた刊行物(各種 Journal の事典的解説)(vi)土地の単位◆590 語	(i)journal 発行人、journal 編集で働く人(ii)(印刷業界用語)journal 植字工◆55 語	定期刊行物の集合、journal を動かす精神、journal が社会や世論に及ぼす影響◆85 語

この表によって語の変遷を可視化できる。各辞書・事典の規模が違うため、文字数で関心の増減を測ることはできないが、「ジュルナル」への関心が徐々に高まっていることがう

かがえる。同じ編者の『フルチエール』の1690年版と1727年版を比べると、37年でジャーナルの記述が倍近くに増え、ジャーナリストの記述が始まっていることが確認できる。

4. 「ジャーナリズム」が生まれた過程

前章で「ジャーナル」から「ジャーナリスト」や「ジャーナリズム」が派生する過程を総覧した。この章では「ジャーナリズム」が生まれた過程について検討する。

第2章で触れたように「ジャーナリズム」は、「ジャーナル」に接尾辞ism (isme) がついてできた語である。接尾辞ismの役割は、「具体的な事実を超えた超越論的な立場から、現実を抽象化して概念化すること」と見るのが妥当ではないだろうか。たとえば病気や病的症状にismがつくケースを考えよう。フランス語ではリウマチ (rhumatisme)、アルコール中毒 (alcoolisme)、マラリア (paludisme) などである。個々の患者が医者にやってくる。診察を進めるうちにすべての患者に共通の症状があるとする。そこで初めて個々の症状を超えた一段上のレベルの視点から「病名」が付く。その際に症状や原因を意味する語にismが付く病名が生まれる。それによって大局的な診察法や療法へと関心が向く。

定期刊行物も単発で発行されている間は、あらためて総称として呼ぶ別の名前は必要ない。ところが定期刊行物が増え、それが総体として社会的な影響を及ぼすようになり、その影響力について論じる必要が生じた場合、一段階上のレベルの言葉、具体的には語尾にismが付く語が必要となる。「ジャーナリズム」の問題にしても、当時の言論状況において定期刊行物が政治の流れに大きく影響することが意識されたと推定される1770年代以降の「フランス革命前夜」において、言論状況の総体を形成している「なにものか」を一言で表す言葉が待ち望まれていたと考えられる。

人々がこの言葉をどのような思いで受け入れたかを示唆する文献は、フランスの辞書・事典中には見いだせなかった。『グラン・ロベール辞書』は、初出を「1781年のメルシエ¹²⁾」としか記述していない。ただ、このフランス語に接した英国人が受けた印象を示す文献ならある。『オックスフォード英語辞典 (OED)』の「ジャーナリズム」の項目にも文例として一部が挙げられている1833年1月の雑誌『ウエストミンスター・レビュー (The Westminster Review)』の記事である。記事の内容は、フランスでその前年に刊行された、カルノならびにルルー著『ジャーナリズム論 (Du Journalisme)』の書評である。

「ジャーナリズム」という語は、意味される事態のためには良い名前である。とにかく簡潔であり、もしこの語が普及すれば、意味の曖昧さを回避することができるからである。(事態を意味する)「一つの言葉」が痛切に求められていた。「ニューズペーパー」や「ニューズペーパー執筆」という言葉は、悪い評判を得ていることは言うまでもないが、これらの言葉は、意味される事態を不完全にしか表していない。イギリスやそのほかの諸国で定期刊行物を通じて維持される見解や知性の相互交流はあまりに重要なため、それを示す名前なしには済ませることはできない¹³⁾。

つまり、当時のイギリスの言論状況の総体を一言で示す言葉を社会が痛切に望んでいた。その時、フランスから来た「ジュルナリズム」の英語形「ジャーナリズム」が的を射た言葉に見えたのであろう。

フランスにおいても「ジュルナリズム」という新語が提示された際に、上記の例イギリスのケースと似た状況にあったはずである。つまり「待ち望んでいたのはこの言葉だ」という思いの段階があったはずだ。

一般的にいて、新語が生まれる際には、いくつかの候補の中から社会はある一つの語を「最も妥当だ」と受け入れると考えられる。その際の基準を考えれば、isme が付加される前の語が、①一般に普及していること②その語が背負ってきた語義の歴史やイメージからして不自然でないこと——の二つが考えられる。

まず普及度について検討してみる。当時の言論状況を一言で表す新語候補は、「ジュルナリズム」だけではなかった。当時の新聞・雑誌の定期刊行物は、さまざまな名前が付いていたことは森原隆が「C.-J.パンクックとフランス革命前夜の新聞・雑誌」でまとめている。「表 アンシャン・レジーム下のフランス語新聞・雑誌のタイトル別分類¹⁴⁾」のベスト 5 は次のとおりである。追加でそれぞれのタイトルの意味をまとめた。

- | | |
|---|-------|
| ・【1位】 ジュルナル (Journal = 日記、仕訳帳) | 163 件 |
| ・【2位】 ガゼット (Gazette = イタリアの小銭 gazetta から) | 91 件 |
| ・【3位】 クーリエ (Courier = 郵便または手紙) | 75 件 |
| ・【4位】 アフィッシュ (Affiche = ポスター) | 62 件 |
| ・【5位】 ヌーベル (Nouvelles = ニュース) | 47 件 |

つまり「ジュルナル」という名で時事的ニュースを扱う定期刊行物が群を抜いて多かったのである。これが「ジュルナリズム」が受け入れられた第一の理由であった。

たとえば第2位のガゼットには、『ガゼット・ド・フランス』に代表される御用新聞のニュアンスが濃くまとわりついていたのであろう。革命を望む人民にはガゼットからの派生語「ガゼティスム」という語は受け入れられなかったであろう。「ガゼット」がマイナスイメージを背負っていたことを示すのは、1789年12月5日付「メルキュール」の記述である。

ジュルナルはガゼットではない。それは全く異なる性格をもたねばならない。ガゼットでは、最初の話、瞬間のうわさ、真偽はともかくも流布し、評価する間もなく繰り返している報告を集める。ジュルナルは大部分この難点を避けることができる。編集者には語る前に熟考し、報告を比較し、それを自身の通信文と対照させ、それぞれの信用の度合いを測り、出来事と原因の関係や、蓋然性だけに基づく関係を示すのに一週間がある。ニュースの選択の主人として一般的な盲信を悪用せず、自分の見識を使用するのである¹⁵⁾。

5. 「日記」「仕訳帳」の意味の journal がなぜ「新聞」となったか

新語が人びとに受け入れられるもう一つの条件、「isme が付与される前の語が背負ってき

た語義の歴史やイメージからして不自然でないこと」についても、「ジャーナル」には資格があったことが推測される。ここでは、「日記」や「仕訳帳」の意味しかなかった「ジャーナル」がなぜ「新聞」の意味をもつようになったのかの解明を試みる。

日記や仕訳帳が使われる領域、つまり個人的思考のレベルや商業的活動のレベルと、新聞が発行される領域は全く違う。前者は個人がかかわるだけだが、後者は社会的、公共的な領域である。両者において同じ「ジャーナル」が使われるということは、「新聞のジャーナル」は、「日記・仕訳帳のジャーナル」のメタファー（隠喩）なのである。

一般にメタファーが成立するには、元の概念と、それとは全く別の分野の概念との間に共通の構造を認めることが出発点となる。たとえば遺伝子工学の世界ではDNAの構造を解析した「遺伝子地図」(gene map, genetic map)という概念があるが、遺伝子を解析する過程の構造は、地形を探索してその情報をもとに地図化する作業の構造が似ているからこそ、こうした「地図」というメタファーが可能になる。既知の地図作成という技術を思い浮かべることによって、研究者は研究の目標が何であるか、どうすればその目標に達しうることができるかを、明確に認識することができる。新しいメタファーを発見することで、最初は無関係であった分野どうしの構造的な類似やつながりが見出され、そこに新しい知が見出されるのだろう。メタファーは評判の悪い修辞学（レトリック）の一部であるだけでなく、別の面では、人類の知を拡大発展させる「エンジン」でもあるのである¹⁶⁾。

メタファーとしての「ジャーナル」も同じである。「定期刊行物 (publication périodique)」と呼ばれることによって社会的に何の支障もなかった新聞・雑誌を、わざわざ「ジャーナル」とメタファーで呼ぶことによって、人びとは大きな見通しを得たと推察される。ちょうど「遺伝子地図」というメタファーで研究者が見通しを得たように。

では「ジャーナル」という語が生まれたことで当時の人びとはどのような見通しを得たのだろうか。筆者は、彼らが見通しを、「日記や仕訳帳」が「新聞」と共通に持つ三つの特質だと考えた。三つの特質とは①現場性②第一印象重視性③総括性である。「現場性」とは著者がその現場で体験したことを記しているという意味である。「第一印象重視性」とは、現場で著者が得た第一印象を重視しようという姿勢である。「総括性」とは、その日一日の出来事の中から重要なもののみを選び出し総括して記載するという意味である。

それを確認するために、改めて「日記とは何か」について考えてみる。

日記とは「日々の出来事や感想などの記録」(『広辞苑』第5版)と言ってしまえばそれまでである。ただ、実際の日記を読むと、誰しも経験することだが、同様の内容を記した伝記や自伝などと比べると、群を抜いた多彩さあるいは豊かさがあることに気づく。たとえば、ドイツの文豪ゲーテ (Goethe, Johann Wolfgang) の『イタリア紀行』である。これはゲーテがイタリアを1786年から翌年にかけて巡った際の日記の体裁をとった旅行記である。

記述の大半は、憧れのイタリア文化への称賛であるが、中には厳しい批判、たとえば「彼らとその(ヴェネチアの)市街をもう少し清潔にしてくれたらと思われる」(1787年10月9日)とか、上演されていた演劇に対する酷評(10月12日)、知り合ったフランス人への厳しい人物評(10月11日)など¹⁷⁾、「ええっ、これがあのゲーテ？」と驚く内容が多々ある。これらの記述は、もしこの日記がまとめ直されていたら、削除されていた可能性がある

る。しかしゲーテは「修正したい点をたくさん見出している。しかしそれは第一印象の記念としてそのまま残しておこう。第一印象というものは、たとい必ずしも真実ではないにしても、それはそれとして貴重な価値のあるものである」と述べている¹⁸⁾。この作品が今もって読み継がれているとすれば、いわば「後知恵」で体裁よく整理された記述より、生々しい体験に裏付けられた「生の感覚や思考」の魅力があふれているからではないだろうか¹⁹⁾。

筆者の提案する「現場性」と「第一印象重視性」は、この「第一印象というものは、たとい必ずしも真実ではないにしても、それはそれとして貴重な価値のあるものである」に由来する。この特質は、『イタリア紀行』に限らず、日記に一般的な特質と考えた。

日記という記述形式に対立する記述形式は「歴史」であろう。歴史は、「日々の記録の中から、ある特定の歴史観に基づいてデータを選び出し、それによって組み立てる物語」であるという面を免れない。つまり「現場性」も「第一印象重視性」もそこには見出せない。

「日記と対抗するものが歴史である」という意識は、『リシュレ』辞書の「ジュルナル」の項目にも見出せる。「(ジュルナルは) 日々、または毎月起こる特異な出来事の物語である。飾り気のない単純な書き方がされる。丁寧に描かれる歴史とは違う」。

蛇足かもしれないが、これまでの論述で、日記文学との関連に興味をもたれる方もいるかもしれない。日記文学はあくまで「日記の形式をかりた文学」であり、その研究は「日記」の本質を理解する上で役立つであろうが、現時点では、日記とは区別したい。

最後に、「ジャーナリズムの起源を日記に求める」というのは発想としては決して新しくないことを付け加えておく。もっとも知られているのは鶴見俊輔である。

毎日の記録という意味で「ジャーナル」という言葉が使われ始めたのは 1500 年ごろからであり、日刊新聞という意味でこの言葉がつかわれるようになったのは 1728 年以來である。それから、連想の比重の逆転はあったが、それでも日記あるいは日録として「ジャーナル」という言葉をつかう習慣もまた、今日まで持ちこされている²⁰⁾。

明治以降の舶来言葉としての「ジャーナル」(ジャーナリズム、ジャーナリスト)は、毎日の記録としてとらえられることがなくなり、市民が毎日つけることのできる日記との連想が断ち切られて、新聞社あるいは雑誌社などの特別の職場におかれた者の職業活動としてだけとらえられるようになった²¹⁾。

しかし鶴見の論議は、「新聞」を意味する「ジュルナル」は、「日記」を意味する「ジュルナル」のメタファーとして拡張されたという視点はない。

「ジュルナル」のもう一つの意味である仕訳帳と会計簿についても触れておく。仕訳帳とは、金銭や商品の出入りを貸方と借方に仕訳けることで日常の経済活動を記録するシステムである複式簿記で用いられる帳簿である。複式簿記は 1340 年にイタリアで生まれ、16 世紀にはドイツ、フランス、イギリスでも広がった。我々が考察の対象としているアンシャン・レジームの時代においても、複式簿記に基づく仕訳帳が普及していたことは間違い

ないだろう。複式簿記に基づく仕訳帳をつけることで、当時の商人はその日の金銭の出入りだけでなく、自らが経営する商店や企業の財務状態を知ることができる。いわば商店や企業の状態を毎日、「概観して総括する」ことができるのである。「日記や仕訳帳が新聞と共通に持つ構造」の一つとして、筆者が「総括性」を挙げたのはこのためであった。

しかし「総括性」は、決して仕訳帳に限った話ではない。「日記」と近接したものであることは明らかであろう。フランスの文学研究者ディディエ（Didier, Beatrice）は『日記論』でイギリスの日記作家ピープスを取り上げ、「もともと日記がいかに会計簿（=仕訳帳）に近いものであったかを示している²²⁾」と記している。またフランス系スイスの哲学者アミエールについての記述でも「日記の第一の役割は、収支決算を可能にすることだ²³⁾」としている。日記も仕訳帳と同様に、一日を概観し総括する機能があるといっても差し支えない。

最初の論議に戻れば、日記と仕訳帳に見出された三つの特質、①現場性②第一印象重視性③総括性は、新聞など定期刊行物においても見出される。定期刊行物は「現場で記者が抱いた第一印象を重視し、そこで得たデータをもとに、その事案がいったい何であるのかという総括を試みるメディア」であるからだ。それゆえに、日記と仕訳帳の意味しかなかった「ジャーナル」がメタファーとして「定期刊行物」、さらには「新聞」を意味することになったのである。その意味で新聞は「社会化された日記・仕訳帳」ともいえる。

まとめ

以上を要約する。英語の「ジャーナリズム」の元であるフランス語の「ジャーナリズム」は、アンシャン・レジーム期に発行された多くの定期刊行物のうち、最多のタイトルに冠せられ、かつ「新聞」の意味も持つようになった語「ジャーナル」に、接尾辞「イスム」が付いて派生した語である。「ジャーナル」以外にも「ガゼット」、「クーリエ」など定期刊行物に冠せられた様々な語があったにもかかわらず、「ジャーナル」が選ばれた背景には、ジャーナルという語が持つ「日記」「仕訳帳」の意味があったからではないか。「日記」「仕訳帳」と定期刊行物の間には、共通の特質があった。その共通の特質とは①現場性②第一印象重視性③総括性である。これこそジャーナリズムがその起源において持っていた特質と考えられる。

さて、我々がいま立つこの高みから、いったい何が言えるのだろうか。

2009年6月にイランで行われた大統領選でアフマディネジャドが当選したが、選挙の不正を追及する改革派との間の紛争が続き、流血の事態に発展している。外国メディアの取材が規制される中、インターネットのソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）やYou Tubeを通じて改革派が発信する現地の情報や映像に接することができる。その意味で、「ジャーナリズム」の始原の特質のうち「現場性」「第一印象重視性」は、新しいインターネットメディアが担う傾向が出ている。「ネットジャーナリズム」が主張される所以である。

ただ、現地の情報や映像がネットに流されるだけでは、公共圏で共有される情報とはならない。ネットで得られた情報を検証して自らの責任で公共圏で共有される情報として発信しているのが既存の新聞・放送などのジャーナリズムである。この「公共圏で共有され

る情報にする」という機能は、「ジャーナリズム」最後の特質、「総括性」の一部とみなせるのではないか。インターネットを擁護する立場からは、「既存のジャーナリズムはネットジャーナリズムに取って代わられる」という主張に傾きがちではあるが、現実には起こっているのは「複数メディアによるジャーナリズム機能の分担」ではないだろうか。

小論を書ききっかけは、2009年4月から特別任用教授として勤務することになった関西大学総合情報学部において「ネットジャーナリズム論」を受け持ったことによる。これまでジャーナリズムの世界にしながら、規範的な論議が先行しがちなジャーナリズム論を敬遠してきた。しかし講義で「ジャーナリズムとは何か」という問題に触れざるを得ない事態となり、考えることになった。熱心に講義を聞いてくれた学生諸氏に感謝したい。

註

- 1) 清水幾太郎「ジャーナリズム」『清水幾太郎著作集』9、1992年（初出1948年）講談社、p.215
- 2) 長谷川如是閑「対立的社会感覚の表現としてのジャーナリズム」『長谷川如是閑集』6、1990年（初出1930年）、岩波書店、p.83
- 3) 新井直之『新聞記者を考える』1994年、新聞労連、p.132
- 4) 原寿雄『ジャーナリズムの可能性』2009年、岩波書店、p.194
- 5) 「アーキテクチャ」については「思想地図 vol.3 特集・アーキテクチャ」（2009年）を参照。東浩紀はこの中の「特集・アーキテクチャに寄せて」で、「わたしたちはイデオロギーにではなく、アーキテクチャに支配された世界に生きている。必要なのはイデオロギー批判ではなくアーキテクチャ批判である」などと論じている。
- 6) N.ウォーバートン『思考の工具箱：クリティカル・シンキング入門』2006年、坂本知宏訳、晃洋書房、p.82
- 7) Chalaby, Jean K. *The Invention of Journalism*. New York: 1998. Palgrave Macmillan, pp.1-2
- 8) ユルゲン・ハーバーマス『[第2版] 公共性の構造転換:市民社会の一カテゴリー』、1994年、細谷貞雄ほか訳、未来社。その第2章「公共性の社会的構造」による。
- 9) 『グラン・ロベール辞書』がjournalの項目で「1625年、出来事を伝える定期刊行物のタイトルとして使われた」とする定期刊行物が何であったのかは解明しえなかった。
- 10) 森原隆「近世フランスの新聞出版とジャーナリズム:『ガゼット』紙を中心に」2004、『史学研究』244、p.37
- 11) データは2009年8月15日にダウンロードしたものにに基づいている。なお同サイトは、原典テキストをデジタル化したもので、その正確さを保障しておらず、「誤りを含みうる」と断わっている。
- 12) メルシエとは、大革命時にはジロンド派として活動した作家ルイ・セバスティアン・メルシエ（1740～1814）だと推定される。
- 13) The Westminster Review, Volume XVIII, 1833, p.195
- 14) 森村隆史「C.-J.パンクックとフランス革命前夜の新聞・雑誌」『金沢大学文学部論集. 史学科篇』、通号13・14、1994、p.63
- 15) 森原隆「近世フランスの新聞出版とジャーナリズム:『ガゼット』紙を中心に」『史学研究』244、2004、p.46 この引用文の中に「一週間がある」とあるが、これから見ると週刊のジャーナルについて語っていることになる。
- 16) もちろん「エンジン」もメタファーである。
- 17) ゲーテ『イタリア紀行』上、1942年、相良守峯訳、岩波書店、pp.156-165
- 18) 同上 pp.165-166
- 19) 『イタリア紀行』が印刷に付されたのは旅行から30年後の1816年である。訳者の解説によれば、紀行文の内容には原則として編集の手を加えられていないという。
- 20) 鶴見俊輔「ジャーナリズムの思想」『現代日本思想大系 12 ジャーナリズムの思想』1965年、筑摩書房 p.7
- 21) 同上 p.8
- 22) ベアトリス・ディディエ『日記論』、1987年、西川長夫ほか訳、松籟社、p.58
- 23) 同上、p.59